

2014年(平成26年)9月25日

病院長からの一言

～病院年度計画と診療報酬改正並びに3%の消費増税の影響について～



弘前大学医学部 附属病院長 藤 哲



先日、恒例の内部監査が行われました。病院長に対するヒアリングで、『平成26年度病院年度計画の進捗状況は概ね良好です。』と答えました。本年度は既に電子カルテの運用を開始し、今回特定機能病院の承認要件として新たに標榜が必須化した救急科を新設しました。さらに今月よりSCU設置に向けた改修工事及び女性医師職場復帰支援施設の建築が開始し、来年の1月に終了予定です。確かに、順調に計画は実行されています。一方、年度計画には、先進的医療技術の研究・開発の推進と業務運営の効率化と経営の健全化の推進があります。これに大きく影響を及ぼしそうなのが次に述べる診療報酬改正並びに3%の消費増税の影響です。

年7月迄(1/3年分)の経営管理指標を昨年度の同時期と比べると、職員の頑張りのおかげで一般病床稼働率がやや上昇し(1%)、平均在院日数が0.8%減少していることが影響し、診療報酬請求額は3.6億円増となっています。消費増税の影響で医療費(材料費等)は3.2億円増となり、医療費率が2.9%上がっています。しかし、比較する昨年度はICUの工事による影響がありましたし、本年度は前述したSCUの工事に伴い関係各科の稼働率は低下します。病院経営上厳しい状況つまり前年までと比較し余裕のない状況が予想されます。

さらには、厳しくなる一方の特定機能病院承認要件の中で、次期(2年後)は確実視されている医師主導型臨床研究・治験の実施状況に対処するための予算措置並びにCRC(臨床研究コーディネーター)等の人的サポートも必要です。また、先進医療技術の研究・開発のために必要な最新の医療機器の導入要望もあり、財源確保に頭を悩ませている今日この頃です。

各診療科等の紹介

医療技術部は、医療技術職員を一元的に組織することで、適切な業務運営を推進し、人事計画及び医療技術に関する教育・研修の充実を図る事により、病院の運営、診療支援及び患者サービスの向上に努めることを目指し平成25年4月に発足しました。検査部門、放射線部門、リハビリテーション部門、臨床工学・技術部門の4部門で構成され、各部門には部門長及び副部門長が置かれています。

及び検査部門長が兼務しています。検査部門には、検査部、病理部、輸血部、診療科に所属の臨床検査技師と産科婦人科の胚培養士が所属し、リハビリテーション部門には、理学療法士及び作業療法士に加え、言語聴覚士、視能訓練士、臨床心理士が所属となりました。また、臨床工学・技術部門には、MEセンターの臨床工学技士と手術部の臨床検査技師、歯科口腔外科の歯科技工士及び歯科衛生士が所属しています。

門においては、これまで耳鼻咽喉科、神経内科の各診療科に配属されていた言語聴覚士の他に、両診療科からの依頼を受けて部門長の指示により派遣して業務を行う言語聴覚士を配置しました。

更に、医療技術部内の相互見学会の実施によりノンテクニカルスキルの研鑽を図ると共に、医療技術部研修会を開催することで、専門知識を有する技術職員としての質の向上にも努めています。

平成26年7月1日現在、各部門のスタッフは検査部門48名、放射線部門31名、リハビリテーション部門22名、臨床工学・技術部門19名となっています。どうぞよろしくご協力致します。

(医療技術部長 藤森 明)



電子カルテ導入

6月2日より、診療記事入力が始まりました。診療記事入力と同期して、診療録以外の紙媒体を電子媒体に置き換える作業にもご協力頂きました。診療科医師、各部門・事務の方々にはこの場を借りて深謝いたします。今後、未稼働のオーダ(外来処置、病棟汎用指示)の導入とともに、現システムの改修を継続することになりますので、引き続きご協力宜しくお願いします。

また、第3期中期目標・中期計画には「地域との連携強化」が盛り込まれました。病院機能の再編が国の政策として推進される中、再編された医療機関同士の連携のためには、どうしても診療情報の交換機能が必要となります。この課題についても、藤病院長から、より汎用性のある情報交換機能を導入するよう、ご指示頂きました。一方、この件については、相手のあることなので、システムを開発する前に医療機関同士の良好な関係を構築する努力が必要と考えます。

幸いこの7月、厚生労働省より青森県健康福祉部に、本学出身の一戸和成氏が部長として就任しました。先日、秋野公造参議院議員が「ピロリ菌除菌治療」の講演に来院した際、司会の福田眞作副病院長より、「慢性胃炎に対するピロリ菌除菌治療の保険適応」の責



務担当者が、一戸部長であることを知らされました。のみならず、病院機能の再編等に関しても、システム連携の在り方をご指導頂きながら進めていければ幸いです。

「電子カルテ導入」という主題からいささか逸脱しましたが、今後もシステムの運用に、なお一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(医療情報部長 佐々木賀広)

山中文部科学事務次官が視察

山中伸一文部科学事務次官が、去る6月19日に弘前大学を来訪しました。

これは、佐藤学長ら役員等と、弘前大学におけるガバナンス改革、教育研究及び地域貢献等、様々な取組状況について意見交換を行うため、本学を訪問したものです。

意見交換の後、文京町地区にある資料館を視察した山中事務次官からは、その後、附属病院に場所を移し、革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)「脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発」の取組や附属病院の運営状況について、中路医学研究科長、藤附属病院長らから説明を受け、熱心に耳を傾けていました。その後、遠隔操作型内視鏡下手術システム(ダ・ヴィンチ)の視察のため手術室へ



移動し、ダ・ヴィンチの特長について大山病院長補佐から説明を受け、また、シミュレーション機器を使用して操作を体験しました。引き続き、高度救命救急センターへ移動し、センター内の救命救急処置室、救命救急病棟及び被ばく医療対応の特殊処置室等の各施設について、花田副センター長から説明を受けながら視察を行いました。

なお、視察には安彦広齊大臣官房総務課課長補佐(事務次官室)が随行しました。(総務課)

8月1日、藤病院長指示のもと事務局と交渉してきた結果、本院としては初めてとなる医師事務作業補助者(ドクターズ・アシスタント「通称 DA」)を採用することができました。現在、専門性もあり人材確保に苦労しているところですが、順次増員する予定です。

DAの導入は、各診療科において医師の行う事務的業務を支援することにより、医師が診療業務に専念できる体制を確保し、もって医療の質向上と附属病院の運営全体の最適化に資することを目的と

しています。現在のところ特定機能病院は、診療報酬における「医師事務作業補助体制加算」の算定は認められていませんが、今後、診療報酬の改定により特定機能病院も算定が可能となった場合は、病院収入の増加にも繋がります。採用者は採用直後の3日間、医事課において配置前研修を行い、電子カルテを含む病院情報管理システムの操作方法、個人情報の取り扱い、医療安全や院内感染対策、保険診療などについて学んだ後、各診療科に配置されます。ま

先憂後楽

医師の事務的業務を支援



医事課長 佐藤 悟

た、各診療科へ配置後は、各科における OJT 研修を受けることとなります。

業務は、管理医師の指示の下、入院診療計画書や退院証明書等の作成、生命保険の診断書や公的機関へ提出する各種書類作成、入院カルテの記載漏れ等のチェックなどを行っています。今後は、各種オーダーの代行入力や退院サマリの作成のほか、外来診察室に入り、医師の隣で電子カルテへの代行入力を考えている診療科もあるようです。

各診療科へ配置されてから、まだ日が浅いため、業務に対して不慣れなことが多いこと、そして業務を指示する先生方の戸惑いもあることと思いますが、先生方の業務軽減のために努力してまいりますので、ご指導のほどよろしくお願い致します。

なお、DAが未配置の診療科につきましても、今後、増員が認められ次第、順次配置される予定であることを申し添えます。

ローソンオープン!



昭和25年に営業を開始した弘前会「病院売店」は、入院・外来患者さんをはじめとする多くの皆様にご愛顧いただいておりますが、この度経営母体を変え、6月2日に「ローソン弘前大学病院店」としてオープンしました。

当日はオープンに先立ち、藤病院長と株式会社ローソン東北支社村瀬支社長の挨拶、続いて藤病院長・福田副病院長・大熊副病院長・小林看護部長・花田高度救命救急副センター長(附属病院売店運営事業候補者選定委員長)、株式会社ローソン法人営業本部遠藤副本部長、一般財団法人弘前会奈良岡理事長によるテープカットが行われました。セレモニー終了後は、開店を待ちわびていた入院患者さん等の多くの方が来店され、あっという間にレジ前に長い列ができました。

(経理調達課)



同店では、街中の店舗と同様に飲食品・日用雑貨等、多くの商品を取り扱うとともに、公共料金払い込み等のサービスも行っています。店頭には並ぶ新商品等、是非とも一度売店に足をお運びいただき、ご自分の目でご確認いただければと思います。また、売店の一面には外来患者さん・職員等が休憩・飲食等できるスペースとして、テーブル・椅子等を配置した「イートインコーナー」もあります。同コーナーには「ATM」も設置され、売店営業時間と同様に年中無休で7時から21時までご利用できます。

今後、同店では病棟での「ワゴンサービス」も予定しています。現在、サービスの詳細について調整しておりますので開始までもう少しお待ちください。

米国生殖免疫学会 Dr. John Gusdon Memorial New Investigator Award受賞

6月2日からアメリカのニューヨーク州ロングビーチで行われた第34回米国生殖免疫学会におきまして、この春弘前大学大学院医学研究科を卒業した船水文乃先生がDr. John Gusdon Memorial New Investigator Awardを受賞しましたのでご報告致します。

この賞は生殖免疫界の草分け的な存在であり、米国生殖免疫学会の立ち上げメンバーであるJohn Gusdon先生の名前を冠した賞で、大学院やポスドクポジションにある若手研究者に与えられる賞です。賞の選考はコンペ形式で行われ、世界中から集まった最終候補6名(私たちの他にハーバード大学、ジョンズホプキンス大学、ミドルテネシー州立大学、カナダ・クイーンズ大学、ドイツ・イェーナ大学)が口演でのプレゼンテーションを行ったうえで受賞者が決定されました。

産科婦人科では、これまで17年間にわたって不妊症あるいは不育症とNK細胞についての研究を行ってまいりました。研究は必ずしも結果が出るわけではなく、暗中模索の時期もありましたが、なんとか研究を継続し、こうして世界に弘前大学の名を轟かせる賞を頂けたことは、私どもにとって大きな喜びです。

私も今回受賞したのは「子宮内膜症患者の末梢血と腹水中NK細胞におけるNCR発現とサイトカイン産生」という研究で、性成熟期の女性に好発し、月経困難症や不妊症の原因となる子宮内膜症の発症と進展、そして薬物治療の効果をNK細胞に焦点をあてて免疫学的に検討したものです。産科婦人科では、これまで17年間にわたって不妊症あるいは不育症とNK細胞についての研究を行ってまいりました。研究は必ずしも結果が出るわけではなく、暗中模索の時期もありましたが、なんとか研究を継続し、こうして世界に弘前大学の名を轟かせる賞を頂けたことは、私どもにとって大きな喜びです。



本賞の受賞は日本人では3人目であり、このような栄誉ある賞をいただけて大変光栄に思います。研究遂行に際し、御指導・御助言くださった水沼教授をはじめ産科婦人科の先生方、そしてともに研究をすすめてくれた不妊症研究チームの仲間達に改めて御礼申し上げます。私ども研究のモットーは臨床と研究の融合です。診療に役立つ研究を目標に今後も精進してまいります。

(産科婦人科 診療准教授(講師)

福井淳史)

第1回医療の質・安全大賞 Patient Safety and Quality Award 選考委員特別賞を受賞して

この度、第1回医療の質・安全大賞Patient Safety and Quality Award選考委員特別賞を受賞しました。日頃より医療安全活動を支えて下さる病院職員の皆様に感謝申し上げます。弘前大学医学部附属病院からは、「部署リスクマネージャーの主体的な医療安全活動を促す部会活動」と題して前医療安全推進室長である福井康三先生により提出していただきました。部会活動は部署リスクマネージャーから構成される事故防止専門委員会に7つの部会を設け、各部会が医療安全上の課題の中から1つを年間テーマとして検討し、解決策や新たな体制整備、マニュアル作成などを行っています。部署リスクマネージャーが主体的に院内の医療安全活動に関わる機会を設けることにより、現場感覚と問題意識を持った改善活動が期待できます。具体的には、事故防止専門委員会は65名の部署リスクマネージャーから構成され、月1回委員会が開催されます。この事故防止専門委員会に次の7部会を設けています。①情報伝達・接遇等検討部会、②救急体制検討部

会、③処方・与薬検討部会、④ドレーン・チューブ検討部会、⑤療養上の場面検討部会、⑥治療・処置検討部会、⑦5S推進部会です。全委員がいずれかの部会に所属するため、各部会は8~10名の多職種の部署リスクマネージャーで構成されます。各部会は前年度の医療安全上、問題となったテーマをもとに新年度の活動テーマを決め、関連するデータの分析、資料の収集などを行い、改善策(案)を提言します。年度末の事故防止専門委員会で報告会を開催し、最終的に上位のリスクマネジメント対策委員会に提案、承認を得て正式な改善策として院内に周知しています。これまでの成果としては「院内救急カートの標準化」、「全職員対象のBLS講習のための指導者育成と講習会の実施」、「転倒予防の啓発ビデオ作成」、「持参薬情報の共有化システムの作成」、「CVカテーテル挿入手技に関する安全指針」、「CVポート運用マニュアル」などがあげられます。副次的



な効果として医療安全活動に関して前向きな姿勢がみられるようになった事と、多職種のグループとして活動することにより、職種間のコミュニケーションがとりやすくなった事があります。この部会活動も当初、「やらされ感」が強く、十分な成果が得られずに苦労しました。しかし、継続することにより次第に事故防止専門委員会の業務の一つとして認識されるようになり、主体的に取り組みされるようになりました。この活動が継続、発展するよう医療安全推進室は陰ながら支えていきたいと思っております。今後とも部署リスクマネージャー皆様方のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(医療安全推進室)

大徳和之、金澤佐知子、上原子瑞恵)

七夕飾り・納涼祭り



【七夕飾り】

7月1日から7日まで、正面玄関の一角に七夕の笹竹を用意しました。

患者さんをはじめ、笹竹の前を通る方々に思いの願いの事を込めた短冊を飾っていただきました。用意した短冊が足りなくなり、何度も補充したところ、たくさんの願い事が笹に飾られました。また、より高いところに飾ろうと、背伸びしながら枝をたぐり寄せている子供の姿が印象的でした。

皆さんの願い事が叶いますように…。

【納涼祭り】

7月30日午後4時15分から、病院正面玄関横で「納涼祭り」を開催しました。

入院中の患者さんに、ご家族や



お友だちと一緒に「宵宮」のような雰囲気味わってほしいと思い、今年もヨーヨーつり、スーパーボールすくい、的あて、輪投げ、千本つりなどを用意しました。

蒸し暑い時間帯にもかかわらず、昨年を上回る多くの患者さんたちが集まってくれたので、とても賑やかに開催することができました。ヨーヨーつりやスーパーボールすくいでは、大人も童心に返って大いに楽しんでいました。両手にいっぱい景品を持って喜んでいる患者さんたちの姿に、スタッフも元気をもらいました。

運営に協賛してくださった団体や企業、また、準備・運営・後片付けに協力して下さったスタッフの皆さんには、この場を借りてお礼申し上げます。(医事課)

弘前ねぶたまつり



津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から5日間行われました。弘前大学のねぶたまつりも大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、4日の2日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続5年の出陣を果たしました。

1日には、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ね

ぶた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて、子供達は「ヤーヤード」と元気な掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また、病院内では、中央待合ホールにミニねぶたが飾られ、来院された方々にも好評でした。

(総務課)

【編集後記】

南塘だより第75号をお届けいたします。お忙しい中寄稿していただきました皆様には心から御礼申し上げます。さて、今年の夏もあっという間に過ぎてしまいました。皆様はどのように過ごされたでしょうか。夏の楽しみといえば「ねぶたまつり」と「高校野球」ですが、今年のねぶたまつりであのような悲惨な事故が起き、まつりが途中で打ち切られてしまったことはとても残念でした。来年は安全対策を万全にして、すばらしいまつりになることを期待しています。一方、高校野球ですが、八戸学院光星高校と聖光学院高校がベスト8に進出するなど東北勢の活躍が目立ち、大いに盛り上がりました。来年も東北勢の活躍を期待します!(病院広報委員 T.O)

「外科手術体験セミナー in 八戸」を開催して

7月19日、「外科手術体験セミナー in 八戸」を開催いたしました。八戸市での同セミナーの開催は5年ぶりになります。八戸市立市民病院のご協力のもと、同院を会場として八戸市周辺地域の56名の高校生が参加・受講しました。今回も医師・研修医50名、医学生、協力企業の方を含めると総勢70名を超える方々にボランティアスタッフとしてご参加をいただきました。

参加高校生は術医を纏い外科医に变身、7つの模擬手術を順に体験しました。今回は形成外科漆館教授にお願いをして、マイクロサージャリーコーナーを設けまし

た。実物の医療顕微鏡を持ち込み、形成外科医の指導のもとマンツーマンで血管吻合手技を体験してもらいました。手術台や无影灯を備えた本物さながらの手術室コーナーでは、豚のレバーを相手に「肝手術」をしてもらいました。人体モデルを使ったスーチャリングコーナーでは、術者と助手に分かれて閉腹操作をしてもらいました。「医学生、研修医でも少し難しいかな?」と思う課題でも、器用に達成する子供たちの能力には毎回驚かされます。最初は緊張した表情が見受けられましたが、閉会式の頃には、皆、疲れも感じさせない元気な笑顔が見られました。4時間に及ぶセミナーは、袴田、漆館両教授からの弘前大学医学部の紋章の入った修了証書の授与、そして自動縫合器を使う際の合言葉「ファイヤー」の掛け声で終了となりました。

参加した高校生のアンケートを見ると、参加動機は、「医療職の興味」であったり「医学部受験への自己確認」であったり様々です。「普段は絶対に体験できない貴重



な内容ばかりだった」「予想以上に外科医は明るいし良かった」「絶対に弘前大学医学部に入学します」といううれしい感想が大多数を占め、セミナーの開催目的は達成されているものと考えています。

受講している子供達に接していると自分が医師を志していた頃を思い出し、何か新しい活力が湧いて来る気がします。また医師スタッフが熱心に子供達を指導する姿には、普段とは違う人間性(?)を垣間見ることができ、嬉しい驚きを感じます。色々な面で楽しいセミナーに、皆様も参加してみませんか。

(大館・北秋田地域医療推進学講座)

准教授 和嶋直紀)